

歴史が息づくガラスの街 （長浜・黒壁スクエア）



1.体験教室が併設され、オリジナル作品もつくれる「スタンドガラス館」第2工房 2.エングレーヴィングの実演風景と、模様がりつけられたガラス食器 3.ガラス制作の実演。窯の中で約1300°Cに熱せられたガラスからガラスアートが生まれる 4.真剣な表情でスタンドグラス作品に取り組む教室参加者。熟練のガラス職人が指導してくれる 5.6.ガラスの装飾部分は、はんだで色ガラスをつなぎ合わせたり、ガラス片を接着剤で固着したりしてつくる 7.色とりどりのガラスで彩られた照明器具ははじめさまざまなアートがならぶスタンドガラス館内



黒漆喰塗り、和洋折衷の重厚な「黒壁ガラス館」では、花器や食器、ヨーロッパの伝統的ガラス製品、オルゴールなどを販売展示

港町の風情を残す舟板塀や黒壁漆喰の土蔵、昔ながらの町屋が並ぶ街道沿いを、鮮やかなスタンドグラスの常夜灯やガラスアートが彩る。まちおこし事業によって劇的な変化を遂げた長浜の「黒壁スクエア」を訪ね、事業運営を行う(株)黒壁に話を伺った。

まちおこし成功の草分け・長浜

湖北(滋賀県北東部)に広がる人口約12万人の長浜市。その中心部に、1980年代の終わりにガラス工芸を取り入れて地域活性化を実現した「黒壁スクエア」と呼ばれるまちなみがある。人気の観光スポットとして全国から年間約200万人が訪れ、まちおこし成功の草分け的存在として脚光を浴びている。

長浜は400年以上前、豊臣秀吉が初めて城を持ち大名への出世を果たして、城下町を築いた。湖上交通の拠点として、そして現代でいう規制緩和と減税で自由な商売を営む制度「楽市楽座」によって商人のまちとして繁栄をみた。今年話題になった黒田官兵衛ゆかりの地でもあり、歴史好きからも注目度が高い。



黒壁スクエアはJR長浜駅周辺にひらけ、東西を走る明治ステーション通り、駅前通り、大手門通りや、南北を走る北国街道や博物館通りを中心に、旅心をそそる多彩な店舗が歩いて回れる範囲に集中して軒を連ねている。長浜駅のそばに保存されている旧長浜駅を起点とする明治ステーション通りはかつて船町と呼ばれた界隈で、腰板として舟板を貼った「舟板塀」の建物が残る。この道をさらに進むと北国街道が現れ、黒壁漆喰や蔵造りで統一されたまちなみが目に飛び込んできた。北国街道は昔、北陸と京阪神を結ぶ重要な街道で、長浜はその宿駅だった。今でも老舗の商家や道中安全を願った常夜灯が立ち並び、歴史風情がただよう。

ガラス工芸によってまちが蘇る



この街道でひととき目立つ黒壁の建物は、まちおこしの立役者となった最初の拠点「黒壁ガラス館」だ。1900年(明治33年)に建てられ、「黒壁さん」「黒壁銀行」の愛称で親しまれた国立第三十銀行長浜支店跡で、歴史的資産の保存とまちおこしを兼ねて1989年(平成元年)、黒壁ガラス館として蘇った。約3万点のガラス製品を販売する同館の周囲には、ガラス工房やガラス作品づくりが体験できる教室など、ガラス関連の施設が集中している。



旧長浜駅をそのまま博物館にした「長浜鉄道スクエア」。現在の長浜駅はこれを模してつくられた



4種類の地ビールと地元の素材を生かした料理が味わえる「長濱浪漫ビール」。ビールはタンク直結のつくりたて。江戸時代の米蔵を改造した建物も、情緒あるまちなみに華を添えている。長浜観光の締めくくりにおすすめ。



自然との共生「魚道と魚道堰」

魚に合った道を設けて生態系保全

紀の川(和歌山県)の流域は、古くから風水害に悩まされてきた。史料では平安時代の水害の記録が残っており、江戸時代には45回もの水害に見舞われたという。河口から6.2kmのところにある紀の川大堰は、ゲートが開閉する可動堰で川の水位をコントロールして水害を防いでいる。

しかし、川がせき止められたら、海から上流へのぼろうとやってくる魚たちはどうなるのだろうか……？実は、堰の両端には魚類が自由に行き来できるよう「魚道」を設け、同時に流域の生態系を守る工夫がなされているのだ。紀の川ではアユやサツキマス、ウナギやヨシノボリ類などが海から遡上するが、魚の種類や泳ぎ方の習性に3種類の魚道が設置されている。流れの速い川底を遊泳する魚に対応した最新の魚道(デニール付パーチカルスロット式魚道)を取り入れるなど、近畿地方の河川では珍しい先進的な魚道設備だ。

安曇川(滋賀県)では、川幅いっぱい

に6種類13基の魚道を配した「魚道堰」を見ることが出来る。水位を制御する役割は持たないので厳密には「堰」ではないのだが、さまざまな魚道が堰のようにずらりと並んでいる様子は壮観だ。魚たちだけのためのこれほど大規模な設備もまた珍しいという。

自然と共生できる治水・利水

人類の歴史は古代から川と共にあった。川に生かされ、川と戦い続けてきた。流域に恵みをもたらし、一方で水害という牙をむく川。時代を経るにつれ治水や利水の技術が高まって、われわれ人間はあたかも川を御して生活しているかのように思える。しかし治水・利水といった、社会的利便性を目的とした「開発」は、地域環境の「保全」を考慮することなしには成り立たない。川や河口を中心とした地域の生態系や環境の変化は、いずれ地域の人々の暮らしにはね返ってくるのだ。人は自然と共生できて初めて、自然の恵みである川をコントロールする資格を持つといえよう。

紀の川大堰魚道



デニール付パーチカルスロット式魚道



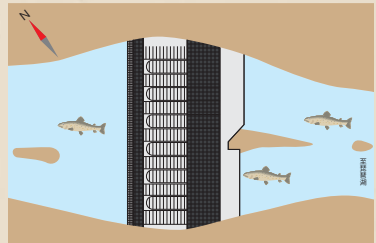
速い流れを好む魚に適した階段式魚道

遊泳力の弱い魚なども利用できる人工河川式魚道

安曇川魚道堰



川幅全体が魚道になっている安曇川魚道堰。魚の種類・習性にあわせて13の魚道が設置されている。



取材協力：近畿地方整備局 和歌山河川国道事務所



5
6



1
2
3
4

1,2.通り並ぶステンドグラスの街路燈や看板が訪問者の目を楽しませてくれる 3.ステンドグラス製の常夜灯門は夕方になると明かりがともされ、深い旅情をかもし出す 4.「びわこフレンチROKU」では、地元生産者が育てた旬の野菜など新鮮な食材をふんだんに使ったフレンチが楽しめる。各種ワインはじめ、滋賀の地酒にも合う料理が自慢。古いまちなみにとけこんだモダンなインテリアに注目 5.歴史を物語る北国街道のまちなみ。江戸時代から人・モノの往來の要衝として重要な役割を果たした 6.「曳山博物館」の特設会場には「ながはまの官兵衛城下まち館」が併設されている



工房では熱気の中、職人たちが吹きガラスをつくっている様子が見られる。現在では数少なくなつた吹きガラス職人だが、このあたりでは工房で住み込み修業をしている20〜30代前半の若い職人が多いという。別の工房では、ガラス表面に半立体的な浮き彫りを施すエングレーヴィングという日本では珍しい装飾技法の実演も見られ、その芸術的な作品と併せて一見の価値はあろう。

今後も各地の地域活性化の牽引役として

1970〜80年代にかけて郊外型の大型商業施設の出店で衰退し、当時は閑散としていたという長浜の中心街。観光客誘引の起爆剤となつたのは、古い建物や歴史風情の薫るまちなみと、これまで長浜に存在しなかつた新しいガラス文化との融合だ。江戸〜明治〜大正〜昭和と、商業都市としてその機能を変化させながらも新しい文化を先取りしてきた地域の人々の精神が今も息づいているのだろう。黒壁スクエアは、地域の活性化に奮闘する地方都市のお手本として、全国の自治体からの視察も絶えないという。



当時珍しかったガラスに着目、歴史・国際性芸術を併せ持つまちへ株式会社黒壁 代表取締役社長 弓削一幸さん

長浜市と共同で(株)黒壁を立ち上げ、まちおこしをスタートしたのは1988年(昭和63年)のことです。海外を含め各地を視察するなかで、まだ日本では認知度が低かった、ヨーロッパ発祥のガラス工芸に着目。これと古い建造物を絡めれば、私たちが目指していた「歴史性」「国際性」「文化芸術性」を持つまちがつけられると考えました。大企業と競合せず、大企業にまねのできない事業が必要だったのです。最初は黒壁ガラス館、ガラス工房、レストランの3店舗から始まり、以降はまち全体の活性化を図るため、黒壁の趣旨に賛同する協力事業者とともに空店舗の改装をプロデュースし、約30店舗を再活用しました。小樽への研修や職人の招聘など、ガラス工芸技術確立のための努力も惜しみませんでした。一方で地元の人材を積極的に活用しました。結果、古い町屋が並ぶ400年来の街道沿いにガラスの文化が埋め込まれ、新旧がバランスよく融合したまちなみが生まれたわけです。スタートから26年を経た現在感じているのは広域展開の必要性です。黒壁スクエアは広い長浜のごく一部。そう考えるとまた長浜ブランドは認知度が低い。ここを中心に長浜全体へ広げたいと考えています。